

## 日常と「非日常」の境目にあるもの

溝越 大秦(大阪大学)

本発表は、ウィットゲンシュタイン哲学における「日常」と「非日常」の境目がどこにあるのか、何が起きているのか、あるいは私達が何を行うのかということを追求するものである。ウィットゲンシュタインは意味の使用説を取ることで有名である。特に意味の使用説は『哲学探究』(以下PI)にて取り上げられている。それを踏まえ、ここでいう「日常」は言葉の使用が明確に規定されている「正常な場合」であり、「非日常」はそうでない「異常な場合」である。この「正常な場合」で運用されている言語に「異常な場合」が生じる時、私達が何をするのか、ということが主な問いである。

「日常」という言葉を少し掘り下げながら、本発表で扱う箇所を概説する。ウィットゲンシュタインは、PIにて、自身が取り組む活動によって「哲学的な諸問題が完全に消滅しなくてはならない」(PI § 133)という。ウィットゲンシュタインは、言葉の新しい使用を提案するのではなく、言語の「正常な場合」(PI § 142)、そして「異常な場合」の観察と例示を繰り返す。その中で、「正常な場合にだけ、言葉の使用が我々に明確に規定されている。(中略)異常な場合になればなるほど、さてここで何を言うべきかが疑われる」(PI § 142)という。繰り返しになるが、本発表は、言葉の使用が正常な場合と異常な場合の間に起こることを追求したい。

そこで発表者は Eldridge(1986)に注目した。Eldridge(1986)は、社会における正常な考え方や行動の一部が異常である、あるいは矛盾していると思われた時、私達は正常な場合で定義されている自己認識を改めるきっかけが生じるという(Eldridge(1986, p.575))。その中でウィットゲンシュタインが残した様々な考察や例の数々は、それら正常な習慣が変更されたと想像される時の自己認識をテストする戦略的な提案になるという(Eldridge(1986, p.575))。

Eldridge(1986)は日常生活で私達の言語使用に伴って変化していく自己認識に目を向けた。発表はその点を評価したい。私達は、日常生活を営むうえで、正常な場合に則って自己認識を立て、行動する。そこで正常な場合で成り立っていた言語実践での矛盾、つまり非日常が生じたのであれば、言語実践の反省を自ら促す。私達は日々自己認識をアップデートしながら生きていくのであり、「日常」と「非日常」の境目はそのターニングポイントとなる。この話はウィットゲンシュタインの「言語ゲーム」概念にも応用できると思われる。つまり、言語ゲームは生き物であって、日々変化しうるものであり、その境界線が明確になることはない。私達は流動的な言語ゲームと言葉の使用の中で生きていると言える。

### 【参考文献】

- Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, revised fourth edition by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell, 2010, 略号 PI  
(L. ウィットゲンシュタイン, 藤本隆志訳, 『哲学探究』, 『ウィットゲンシュタイン全集 8』, 大修館書店, 1976)
- Richard Eldridge, *The Normal and the Normative: Wittgenstein's Legacy, Kripke, and Cavell*, *Philosophy and Phenomenological Research* Vol. XLVI, No.4, June 1986